



門ホ2
號563
卷

吉和
辛
函工



偽字大書き抄

古け偽字に書きあるゆあよ

古け偽字づひハシキ字もありて、古事記日本紀万葉集
など或ちトメテたり。天唐けより上つかみ書ふえ
たるを皆一格みてみざれたる事はしづくはいづるゆほ
て志すほどといひは。に古文、伊勢於乎衣惠などの音、もと
かへぢのびうくよふらばりそ、せふらそく詞を、可
字音もと記し、かくえのあれば乱きたる事をうそと
里けは。そ後の大和く、伊勢於乎衣惠などの音代唱(よ
うちをうんもんに)はくさうば、古せんたすれをよう文字
めどりみてこれとかきもう事れはくまあれよとゆくか
るよりふはれば先一つ二三と申すト日本紀影本紀顯宗の

清兄第ハカラ、清事城注文ニテ、其二曰億計王、其三曰弘計王
ト云々、又古事記開化の條ニ、清姊妹ハ皇女のち名に姓を意祁
都ハ賣と申シ、宍我袁祁都比賣と申セト、事清り、承ム
名トモ、於ヒテ申セリ、よどけうける、

億ハ、於カ反ましカ反まて、音オクナシ、或於の漢字に用ひ
弘ハ、胡肱反まで、吳音チウナシを、乎比海ニシヨ用ひ、之の
よはシ、此ニ帝比清名を、古事記よも、意富オホ祁ケ命、袁祁ミ命と云
ミ、セテ於ハ、央居反まし衣虛反まで、音游ニ、乎ば、戸呂反ま
ハ、洪孤反まで、音胡、胡字ハ、韵鏡匣母より属するをもす、よびて
匣母け字も、カキクケコヒ音ナシ、ガワキウエヲシテ、ア
ルに乎伐チの後まよは因ひけりナリ、又於と乎とよ、同
音とある時、そばをえど、於乎比音ヲノ別ハ、キシ事ナリと
云人乃能也、甚く、
玉篇よ、於央問、反居也、又倚乎、

支歎辭とゆゑ、於の乎と同音なり。凡て倚乎反歎辭あり。
さるるかくままで、オルハシ字には用ひず。は、央向反せ。了されば、
別の音なり。以上を古ホモラニ又意祁都は賣の意へ、意思れ意字ヨハナ
で、億字の省文なり。我古の書に、文字ハ畫を省ハナて書き、傍り
一率多し。健を達とかき、伎ハタチをもとあつてある也。、
質朴スナホたゞく。古の事あつとも、清兄弟、代一つは名よ唱ヒキヤシムす
ハ傳ハツシテ、うるざれ、於乎の音よあつても。一率多く、さう億オハシ
と弘オハシとぞ、や義いふにわうるがといはるに、億、於保の略もて
大比義オハシ弘オハシ小れ義あら。

此書名北義、く詳よハ知かざりけむ。されば強て試しには
も、億計弘計北計ハ、和計の略也。大別オホワケ、小別チワケといふ義よも
ハルカ古の皇子北清名よ別といへる事多し。そい氏ある
領地あらとふち賜へてこつきての名とえゆうあいが

れを生教はゆくも、奉若言をハ大旨オホク小旨の義ナカケと
としに付す。又意祁都志祁都の祁都ハ地名あとよやと言
長いひ付す。シハ固ト地名を大と小とすてちぢて、大泊
瀬オホバツ小泊瀬オホバツ大岐蘇オホキノサ小岐蘇オホキノサなどそいふ事ればば、いふもす
事とおもふよや付す。

大を略して、於よりとしに付す事た、例多き、中に新撰字鏡
に阿婆於波和名抄オホバツ母於波など付す。於波ハ大母の義あり、
又乎オホ小の義なる事を當の事より、甚しも新撰字鏡又姉
母乎波、和名抄又伯叔母乎波、ど付す。乎波ハ小母比義あり、祖母
を大母とすに寫して、へる名、物語の類す。祖母とて、
伯叔母哉とばとしに付す事當心たゞく平れ物語の新
此書、おほくも俗名とかき誤りて云、うつねばざみよ
も、かく書さばに付す。前後文哉考す時、ひづて讀す
べくモ付す。よく俗字哉あくまで見付れば、やうじめ
ゆくつゝ、文字鏡和名抄オホバツに、阿父と於地、伯父と乎地など
見えたるも固ド例よ付すけた小の義は、間のみすと付す。
別の義人詞あるにも、於と乎とすて互々と詞とも、すぐて於
俗字あるべきと乎とす。字付すれど、べき哉於とすて、ひ
に乱れたる事たて、唐より上つて、せまに、付すが又伊馬衣
恵れわうある事を、於乎のヨリも何より固くして、字例す
れたら事ハセムに付すば、互キ、字例を考へもよき。沙門契
沖オシ和字正溢抄、楫取魚彦オシタチヌヒコが古言抄などよ、古語付俗字の例
を舉へるが、所う付す。

正溢抄並々要略古言抄などよも、於語付事もあく
すも、れづれあす、シハ僕オホシが別よもセーものなり
さて古書此偏字に用ひる字音ハ唐以上、あとは宋北初など

此字書につき考ふるを、よく叶ひはり、吾み、まの古め人の漢文字をほひ傳ふ事も、全く唐より承たるをばよけれど、音義皆別へば例よりて、事はく、明などの字も生る。字書ハ、唐人の例よたうひて、わが古に合ハざる事をゆる。

此字音の傳ふる事ハ、古言より字を傳ふ字格より見て、けふぞれ古き、近世韻鏡の學、找そづと古人の書によも、いれられ黒説、とも仰れど、わがそうち古書比例を考へざる類なり多うゆも、

古書につきて傳字の例を考ふり考り

古比傳字の例を考ふるに、真字にて書たる書によりて考る事なり。いよとひは、に、元暦以上の傳字比傳字よりして、書は記せる書よりも、平傳字より書つる書ハ、後のせば人なり。うまくいかずれに本いもあらむ。傳字の證は取れど、ある。後の四字行阿が傳字は、ひといふものたれをれあれはりて、よりも、な傳字じくかきたる書と、ば、嘗り阿が傳字づきの字よ、改め傳字は、嘗古よも、うしき傳字ぬ。さう字よ貫之比筆なりと、あややんごとれき家に古今集比秋部の下、一卷傳字は、よりあつて、ち生らをとんけりしに、また十九貫之の筆がうとも、さめがうり傳字あれど、いふ字よ書つる本と見えて、傳字古に、うれつて、又重之集の自筆べ不の模を、又永嘉五年麗東殿女清の繪合記模本れど、傳字も、それを筆者ハたゞに、うつり傳字ねど皆も、のれ筆者と見ええ傳字、傳字古にうれつて、かのれのものは、形傳字ト、れど、平傳字にうる手に行はれど、傳字で達とぞなづけつべき。

さて生字を書るに、よりて考ふべしといひはる、栗ハ古事記

日本紀萬葉集などに阿波と云ふ古事記日本紀万葉集
集などに阿波と云ひ、殖ハ、古事記日本紀万葉集などに宇惠
と云ふ上ハ、古事記日本紀万葉集などに宇惠と云ふ。あとあれ
をもとて、もと宇恵のわざと云ふ代りと云ふ。いはる字、いもきたる
書は、後の字より傳すよ。おの文字代りよ。かきあられ
られて、正一ノ字。又古書の字、傳すよ。さて、もと、の字
書と後ろのそれ、人からまことにうけたるやうて、もと、の字
に傳すの字とれど、傳すの字とくわく、さものに傳れど、
ひづみの字とくさんせるよりは、初字の訓、方あたに字比や
あち、それ、古し集物名のすよ。せうじといふこと、代がくして、
それもとと新うひもととよと傳り、そり初字は傳字、字
為すんよ。、もと、うさうびをつくして、より、しよげ、詞と、用

ひはくき、行阿が傳すひよ。又同書に、モヅれとくして、づ
マサの字とぞあゆとやとよと傳ふ。これ尾花ハ、平波安太の傳
すれき、安とばあくとやとよと傳ふ。これ尾花ハ、平波安太の傳
尾とおれの傳字、とおもへる。うつ浦也。行阿が傳字を
勝尾寺などと尾尾ハ、手せ傳すなたる事、古書の例皆おも。和名抄
羽族部、尾、鳥獸尾長毛也。和名ま、國名の尾張と、平波里と訓
注の傳すあとすを、めくつて、ぞけりける。又通毛止保闇の傳
字れる事、古書の例皆おとけり。ぞけりける。貫之力、よ、儀通の明
神といふとて、あと、左半とおなづくべーかハとどめり。行阿が傳字
止半留め。又操も、美左半北傳字、靈異記より、竿も、左半北傳字
れど、竿は左半の傳字。持送集のうちに、みほせて、左半北傳字
あ、ううううとおはなど操と水竿ととおねてよ。傳る。此數、
と多々、此種歌ひづみの字と、古人の字す。はる古書の傳

字比例よたよたべる事なぞればれをも傳すの後とて、傳字
代言め候る事なし、

後此等のあとはけいひうけの詞叶はともがまくしし、四位志為
め傳字にて椎シハ志比の傳字ハシマシと、四位を椎シよしと也、木居
ち古爲シテ傳字ハシマシと、志比古比の傳字ハシマシと、木居シと寫シよ
ひよせ、折ハシマシ乎里ヒリの傳字ハシマシと、織ハシマシ於里ヒリの傳字ハシマシと、紅葉ヒナエ
を錦ハシマシよしとシタて、枝ハシマシ折ハシマシと織ハシマシよしとシタせはすシタれシタあれ
皆古乃例ハシマシよあはば又ハシマシタハシマシとハシマシ言ハシマシにハシマシいわハシマシたハシマシすハシマシなどハシマシはハシマシ、
とハシマシタハシマシとハシマシ言ハシマシとハシマシ通ハシマシりハシマシてハシマシべき詳ハシマシよハシマシせハシマシをハシマシいハシマシの
あはハシマシかりハシマシめハシマシひハシマシうハシマシる詞ハシマシとハシマシ、傳字比例よたよた叶ハシマシ
をハシマシせハシマシき、

又而ハシマシくも詞ハシマシ古書ハシマシ證ハシマシなれど、傍ハシマシ比例よたよたてハシマシ傳字と

言ハシマシひハシマシ事ハシマシをハシマシりハシマシは前日付事ハシマシ代乎止津比ハシマシとハシマシ事ハシマシをハシマシ、
至ハシマシに乎登都ハシマシ日ハシマシとハシマシあられ詫ハシマシにきくハシマシよ候ハシマシれど、前年の事ハシマシを
乎止ハシマシ志ハシマシとハシマシハハシマシき詫ハシマシ古書ハシマシに見ハシマシえ仰ハシマシねど、乎登都ハシマシ日
め乎登ハシマシと、全く同語ハシマシとハシマシあられとも乎れ傳字ハシマシとハシマシめ
候ハシマシ、乎止津比ハシマシ乎知津日ハシマシ、津助ハシマシ乎止ハシマシ志ハシマシ、乎知年ハシマシ遇ハシマシあた
る方ハシマシとハシマシて乎知ハシマシといふ事ハシマシハ遠近ハシマシと乎知古知ハシマシなどハシマシ、乎知ハシマシて止
と知ハシマシとハシマシ通ハシマシ上詞ハシマシをハシマシればハシマシ事ハシマシ候ハシマシ、乎知ハシマシは語ハシマシの事ハシマシ候ハシマシ、
いづれあるハシマシがハシマシづハシマシきハシマシをハシマシあはハシマシ遠きハシマシとハシマシ遙ハシマシる方ハシマシ候ハシマシ、又物語ハシマシなどハシマシ、美志呂久ハシマシ多志呂久ハシマシ、
どハシマシよ詞ハシマシ候ハシマシ、此志呂久ハシマシ才志ハシマシとハシマシばハシマシ嘗ハシマシ渴ハシマシて唱ハシマシなハシマシれハシマシばハシマシ自ハシマシをハシマシ
ひハシマシ活ハシマシあハシマシんハシマシがハシマシ、キハシマシ代ハシマシ萬ハシマシ志ハシマシとハシマシ万志呂久ハシマシ、といふ事ハシマシとハシマシ、
凡志呂久ハシマシも、動ハシマシく我ハシマシの詞ハシマシとハシマシ、万志呂久ハシマシハ目ハシマシ動ハシマシく事ハシマシとハシマシ、美志
呂久ハシマシも身ハシマシ軽ハシマシく事ハシマシ代ハシマシ、多志呂久ハシマシは身ハシマシの發達ハシマシとハシマシ、物の動
く事ハシマシといふ事ハシマシ、清水流ハシマシ生云ハシマシ萬志呂久ハシマシ立ハシマシ軽ハシマシく事ハシマシとハシマシ約ハシマシてハシマシよハシマシあ
多知呂久ハシマシの傳字ハシマシとハシマシいハシマシけ送ハシマシもハシマシよハシマシき

ヨレあくねど程也かれば志呂久とし奉事、嘗同讀あれば稿もぎ
奉侍候に此類の事あるべからず、嘗て國の義と例を考へ
合する所を偽字ゆうじにかゝれ候。

又古書に印キ説も見えど、傍の例とよべき詞をなすてさ
だめが、キ詞候ふはらひの義を考へ解して偽字と定む
る事を候ふ。トハ澤鴻と於毛多加といふ事、古書に偽字候
えそはくねば候をんか乎あんう、言がくう候りと、賀
茂生潤の考、枕学子にわざづけ事をひて、名をうき
こへあぐちあぐんとおよとある。浅見れバ面高きすよしれ
たるをとみりれ面の義とて、わの偽字と定むべーといへ
る。又檜榔と日本紀の古訓アギサト候り、されど皆の訓注
あけ共バ、一うなづく。此詞如を湯りて唱へたり。自古
うきのうがかりと、谷川士清の考、檜榔ハ味あるものあり
が、味勝せ我をんかう。ば知の偽字と定むべーといひ候
ま、さて近年。ノアモテ、カゼ和名抄より深江輔仁が和名本
草といふ書、せに生る、残え候る。此二人の考によくある付
里ぬ。すくはら本草に、澤鴻多可檜榔阿知とあり、此本草をバ
ルニハエビゲていひ候る。はなん、此二つをかくかきひいて
候りて、ばそく論をき事より候れど、於所をき證を得ぬ。因どそ
に義代考へ補へて、偽字を言ひべきこととぞそちれ
候すをも。

又古書代證とれく、字句付義を轉がして、偽字を定め
が、す詞をたまく候り候はいよもしかばくやうなまく、
かき證を得むてあ姑くりあう候字米、あくはやう
めうきなれどに達して、轉をうきて候りめべー、されどこハ
いとすれあふ事よとほ候。

花山一條の清時などより、上つがみ家記（ごめんの記）の中にもいよいよ
きに寺院の詞文假字（かじ）が書かれ、車たまく候（まく）され
ど僕（ぼく）はこの家記の類（るい）れ書を多くそぞり作（な）ねば極く（ごく）
しきいと家記（ごめんの記）と廣くよしん人（ひと）もこゝよん
を行はざまよなん。

五十音によつて假字（かじ）例を考ふる。

五十音といふその、老娘（おやぢ）ハ慈暦（じりき）の學（がく）す、どより出來つたもの
は傳（つら）りて、其用に了事（りじ）、いと妙（めう）なすをひく、れをもとわが
國（くに）の詞（こと）假（か）も、うそ文字の音（おと）とも、印（いん）めくじ（くじ）事多く傳（つら）り、
ト古書（こしょ）此傳（つら）すの假（か）代（だい）、五十音（ごじゅんおん）をそて、考（かう）へけるに、阿伊宇
衣（い）於（お）の行（ぎょう）まで通（つう）へる詞（こと）、息（い）と、於伎（おと）も、伊伎（おと）も、地名乃
愛宕（あたご）と、於多岐（おとぎ）も、阿太古（おとこく）も、伎（と）と古（こ）と加（ま）は久計（くじ）
也（よ）、伊奈津（いなづ）も、伊由衣（いゆい）與（よ）行（ぎょう）まで通（つう）へる詞（こと）、老（お）と於以

とそ、於由（おとそ）とも、於興（おとおき）とも、老（お）と於ち（おとち）と、事ハ全集解（ぜんしゆけい）又
由（おと）も、毛伊（おと）とも、萌（おと）と、毛衣（おと）とも、毛
由（おと）も、毛伊（おと）とも、萌（おと）と、毛衣（おと）とも、老繫（おと）事（こと）と於ち（おとち）と、
とふ地名の岩市（いわいち）と、阿由知（あゆち）とも、阿伊知（あいち）とも、傳（つら）り、和為宇惠（わいうゑ）乎（む）行
乎（む）通（つう）へる詞（こと）、撓（のぞ）を、多和（たわ）ニ（に）とも、止乎（む）ニ（に）とも、（たとえと止とハ多知豆婦女を、
多和（たわ）也（とも）、多乎（とも）也（とも）、米（こめ）也（とも）、戰栗（せんり）と、和奈（わな）ニ（に）とも、乎乃（むの）ニ（に）とも
モ、奈（な）と乃（の）と、奈仁奴（なにの）聲（こゑ）と、古惠（こゑ）とも、古和（こわ）とも、（こわづえこわづえ）居（ゐ）居（ゐ）を
行（おこ）の通音（つうおん）なり、聲（こゑ）と、古惠（こゑ）とも、古和（こわ）とも、（こわづえこわづえ）居（ゐ）居（ゐ）を
半里（はんり）とも、爲（ため）とそ、（反）白水（しらみず）と、辛討良（からうりょう）も、字計良（じけうりょう）も、誘（いざな）と、辛
古豆留（ことうりゅう）とも、和可豆留（わことうりゅう）とも、傳（つら）り、かる鄭經（せいきん）あり、傳（つら）り、（くべて）
古語（こご）と、五十音の通音（つうおん）あるがまし、又波叶不閉
保（ほ）の行（ぎょう）ても、（くわく）詞（こと）傳（つら）、添（そな）と、曾布（そふ）とも、曾比（そひ）とも、曾聞（そもん）とも、
曾波留（そぱりゅう）とも、思残（しざん）、於毛布（おとふ）とも、於毛波留（おとぱりゅう）とも、問代（もんたい）
止布（しふ）とも、止波留（しふぱりゅう）とも、止聞（しふもん）とも、止波留（しふぱりゅう）代（だい）、可波留（こぱりゅう）とも、可聞氏（こもんし）
とも、可布（こふ）とも、（ふ）新形（しんけい）傳（つら）、此波叶不閉保（ほ）の行（ぎょう）ても、（くわく）

詞と誤りて也伊由衣典行よ誤る事はり添と曾由ど
ひ教哉乎志由などといひて行ふ事皆ひがまよけふ又也
伊由衣典の行すてもくく詞傳、榮と左可衣と、左
可由とも、嘶と伊波女衣とも、伊波女と、覺と、於保衣と、於
保由とも、見哉、美衣とも、美由とも、了敷行、あれと
禪里て、榮と、左可布とも、嘶と、伊波布といふれど、い
きひうことよもん、保字づくづれとゆきたるけよハはれど
堀河院百首、まゝハ六百番歌合せすあらに、嘶と伊波女伊波
由ともつづいたるは、歌詞を誤りざらしのふや城近き此
れすよも、さうよも、代約いどよ鮮射ども、あ多くが、こ
ハセウスも、代約のいどもあなどいとて、詞をも
まくびがるれハ、傳字れひうるせはばくじ、詞をう
こなすも、もくいをみれ、あうたまえいひの類なれば

アセミと考へ、傳字哉らうてけうが、べき事より傳けふ、
又和為宇惠乎比行すてもくく詞とば後のせれ人多く誤
り傳る事と、殖名、宇惠宇と宇和流といふ詞名と、宇闇宇由
あどひ居ハ、湊惠湊宇湊和流といふ詞たる哉、湊闇湊由など
いふ事、皆ひがまに傳不闇ハ、波比不闇保比行、由た也伊由衣
の行なる哉、和為宇惠乎の行と、三行と混ずる事ハ、いとて、傳
べまうそく五十音の通音すてもくく詞と、あくわかた誤
用ひたる事と古書よハ言ふそ傳くもん

古より角ある傳字までひ二三種法あり

傳字は、ひの法と、事ハ、やむどなきあくわくにひをやく
より家に傳くる法ありて、うきをある事と、やうけをす
傳れど、それハ下ざまの入れうが、ひうり傳くぬ事あれば、そ
をそくに傳くんで、そあ方に人かとり用ひる法と、古れ法と今

れはとお二つめんやりけま言ふゝれ百年あまうれひと、旅波
カ沙門契沖といひ仰るづけどもて考へてする事よりて、古書に
即記述あるとどうぞ、を例と定め仰るよをん、又そとがて
云にあくんだがり角ひあれ。法よりて、されば行阿が儀字ば
よどりひ仰るよをん、此行阿が儀字すとひとてすよ一巻仰る。
されよ京極の黄門かえれ、捨遺愚草の清書を、大が助祝行
すあきく／＼あひづぶ時、祝ひ於半衣惠遍伊為はなど
れ唱へゆざく／＼して、誤やすくわきゞ／＼き代ありひて考へ
さすて彼つよ見せまる／＼せきれど、それとことわうよ／＼とは
めたまひて意字代すれ定ちろまにかせもうちと、行阿が祝
う孫をうれい祝りう考へおくるもくち家に侍り／＼ると、
さくに書ひうめりぬとあん、あれハ全く祝りう考へ定め
わらふ事よハ仰れど、黄門かえれよ／＼とく／＼ひとあひ

たる事なれど、黄つのあれ儀字づひとそ字よ／＼ひと
なり今行阿がち／＼れ々々人よそのことを考へ仰るに、漢
字よ四事難字をなぞり奉れあむになぞ／＼てさざあ／＼新を
ひと見えさて、桶／＼と桶／＼と時ハ於の儀字小桶といふ時ハ於
字の儀字をれりとソウハ年の儀字、おきみといひ時ハ於
れ儀字をぞ／＼唱へよ／＼てかくとだ／＼るあり、ほきどい
たるよりふあうて、ば／＼く／＼とといひ事も知られ候す
又、ま／＼一日不紀万葉などと於よ／＼くるおも仰れどそれ
あひうひき／＼る事もありて、とふどくれき／＼い／＼なる事
あほんひ／＼あ勃れ時勢はゆ／＼後承等と用ひる儀字
ほひとよ車と號すて、わが國の詞をかくみ四字／＼あひ
てすをん車ハ／＼とわうな／＼とて、をほな／＼と、仙源抄

の段々くさりあつて、偽字だといひこもる事にまづき
それなりといふれど、こひとみづうなる論より、その偽字が
定する車と書きまへたりしをも思え。偽れど西夷による
車と破れしふと書きても、ゆうせんえさい、と行つた
偽字は、ひととくもすでよく車とせら事つてゐれ
くるわざをされど、今にありて、一のほっこりをゆくなれ、かねば
そのあんなぞめを師傳れ、況よそじつむ車と云うかり又ハ古
とがてみて、ゆき筋と後づんのんもなくて、とではうなくとみ
いどんすとかくうにまよひまきとんけれまちとをくふ、
れ此辯によくて、あくまでもうてゆりぬ、と古の詞の不と考へて、
いよ／＼の書とよそんくがる／＼古の例ある偽字とよく考へ
巻き車にぞ使ひける、偽字と誤る時、ハ詞のを皆異にする
ものにて、偽れば偽字といふて、ハ詞をめらひる事が多し。

詞の義とがべりて、古の書とバ後れ作りべき今そのとよ／＼
と一つ二つもひるん、辛志ハ愛也食也、於志ハ忍也押也平伎
ハ招也获也、於伎ハ息ヒ起也、字間ハ上也笙也、字惠ハ殖也饑也、波
閉ハ延也纏也、波衣ハ生之艱也、かゑ／＼ひ教へもほ／＼び／＼、これ
とがひ／＼亂して、くるん／＼ひ／＼、どう詞の義と誤りゆくばく、偽
字の例と考へて、よく考へて、あくやれ、古書とよ／＼
よ思ひまゞ／＼車多くはり、かれ、書ふれぞ、て、後れずうちなる
偽字と、必於べき字すうぞ使ひ、字向ひ道、公なるものにて、
私のこれにほ／＼べきしれり、ゆくねば／＼ひひ／＼れよきくの
定めあられする車ならとも、渠等、うば改め作りて、べ、ズちき
車ハ、すてゆるゆくや、あふぐらにわが好むよ、引れて、渠等
ちうて、もれとすくんとほまたぐひのんをゆるよ、がくそて、りるわざ

トやうもん

古れ偽字づひを考いでも、權サ偽故成後より下まれり。古れ偽字づひの事ハ、契冲より下、彦介、伊能ども本と考へられど、文和のは權サ任都成後といふは、少メ考へいふ事にて、契冲ハモ詫ト申づきする事にぞ似りけふを成後が万葉集れ跋々、抑於和字音義、從京極黄門之以降、尋八雲之跡之輩、高卑伺其趣者歟、仍天下木底守彼式而異之族一人而無之、依之一人ニ似背萬葉古今等之字義者也、僕又專彼式而用來年久、但特地於萬葉集至子書加和字、漢字右、而聊引散愚性之僻案、偏當集之音義所令點之也、是且非自由、且非無所詮、其故者、依當世之音義、書用其和字、則違萬葉集義理之事有之、所謂當集者、遠近之遠字之假名者、登保、登書之、草木枝條之撓者、登乎、登書之、當世遠近之遠字和音者、登乎、登書之、然者用書此和音者、所可令集之字語相。

違也、又書宇惠者、殖也、書宇邊者、上也、此外此類雖有之、恐般系而注別紙、とありされば、古の偽字づひの事に、つつきよりハ、以成後こそ始あれ、こめ人いうなり、人によるとけんぐりきこと、生てられぬらべ、を別紙と注すといふ、そなへが取くす古の偽字找集めからむ、それよ傳ひて、そあも、めをなげば、とかく業かると、そちのかくれて人のむけり、ゆらぬこうとくられ、元禄享保れはよう、此みうどの学に、いとくを考て、後の世の誤と云ふなうりを、まう傳うて、生すらに、うろふうむる人、すきぐいとくはうで、來けりぬ、やるはまくられときいへる、とくも、げりも、よう不可くて、よくいひゆるとおぼえゆるもれやうめれども、おづくら一の門をとてんとするくせ作りて、いとくそくあいでくる車に、かへりてうきの車をまくも、ゆらねばらとくらがつて

足なれば、そのとそくとより、又あくまでなるべやまうをすすむ
車も使ひたり、さればもんとれども車の事よりとては
もハ作、ざくらうこそはるなれど、み儀まづひの車ハ古
を考へいへる人へ、考へそくもて車ぬがいとこわう所く
てうごく角、うふおぼえ候むたれ、うよめくかうで、
古字ハとまが、きもれよをん候りけ、かの新井苑後守れ
船長の未就などよなる事ハ、よく考へれうと見えゆ
ものよほれど、古の儀字の事はわきまへなり、ゆゑふをう
きうるをとあきひが、とと見え候むよめん、さうした
すくねたうへんとくらうにうとくてきらとうと作り
けれ、まゝて安の者あれんのかくくらかくとや、う
れば、ば儀字のくわう所くあはり、車のそれとを考
りふくらひけきらきうちへとくひはりそへくや、

享和元年八月廿二日

手主酒上

儀字大き抄畢

此書は、とくにやむとあるが、よ、の儀字は、ましの車
どもく、うあうせとおほせ、とあうけるので、ましに
をう、ちを、うび、うひとて、さじよあうせとましに
ましと、とば、とぎを、とて、板よあうね、とく、儀字は、
の車、が、や、繋、沖、詰、み、よ、う、とて、後のく、られ、考え
えて、車ぬれ、今そ、は、う、海、定、たる、が、と、ま、と、あ、
小考は、く、ま、う、へ、と、て、考え、まの考え、い、て、詰、の、こ、な、る、も、
を、ま、の、う、と、う、げ、と、ま、れ、ど、う、い、学、れ、人、か、と、こ、い、る、ほ、う、
ぬ、く、ん、う、ひ、に、り、け、ま、ど、は、ざ、く、考、よ、ハ、と、す、け、あ、き、ま、う、ら、
う、一

文化の四年と五年の間にわざやの主人

附錄一卷

音便假字例

答鈴木長溫書

右嗣刻

織錦齋藏板

